

昨年末にリリースされた米国発のチャットAI(人工知能)が話題だ。硬派な質問にも「それなり」の回答が用意され、しかも学習によってどんどん完成度を高めていく。ただしそれはやりとりする側が思想や思考を吸い取られるような感覚でもあるし、無意識のうちにAIによってコントロールされる危険性も包含する。この場合は、意図的にアクゼスすることで情報の海に自らをまき散らしているわけでもあるが、知らないうちに自分の行動が収集され、管理される状況も生まれている。

代表例が「カメラの目」だ。防犯・監視カメラは四六時中、間断なく誰彼をかまことなく、道路や街頭にはじまり、店先や建物の中、電車やバスでも撮り続けている。映しているだけではなく、多くの場合、画像データは保存・蓄積(録画・録音)される。そのほか、自らの意思でネット上にセルフポートレートをあげる場合も少なくないし、知らない人のスマホで写され、いつの間にかネット上にあげられていることもまれではない時代だ。

このデジタルデータは顔認識ソフトを介することで、ある人を特定したり、情報を二次利用したりすることも容易だ。たとえば識別機能を活用し、属性を特定して商品開発やマーケティングに利用したり、混雑度や動線・人流を計測したりしている。民間事業者に限定しているが、国の個人情報保護委員会に設置された「犯罪予防や安全確保のためのカメラ画像利用に関する有識者検討会」が、顔認識カメラの課題を整理してパブリックコメントを実施中だ。

しかし、より広範囲にデータの収集や照合が「強制性」を伴って行

顔認識カメラの慣れと恐れと



時代を
読む

専修大学教授
山田 健太

われるのが警察の捜査などの行政利用である。コンビニなどのカメラ映像を犯人割り出しに活用するのは慣れた光景だが、あらかじめ設定した人がカメラ映像で確認されるど、瞬時にアラームを鳴らすことも可能だ。カメラ映像を流して逃走中の犯人の情報提供を呼びかけるのは一昔前の捜査手法で、情報をデジタル・ネットワーク化して一元管理し、特定者をリアルタイムで一生捕捉し続けることは、仮定の話でなく、すでに一部の社会で実行されている。

無差別かつ大量の取得・蓄積が本人の意思と全く無関係かつ自動的に行われ、しかも、それを拒絶できないのが現実社会である。こうした情報は、ネットワーク上で他のさまざまな情報とひもつけられ、本人が想定しない使われ方もするだろう。やっかいなのは、AIによる判断の過程で、その条件付けによって大きな差別的効果を生む可能性が高いことだ。以前、警察がイスラム教徒を差別的に監視活動した記録がネット上に流出して大きな問題になった。最近も、外見判断で人種差別的な職務質問をしていたことが発覚した。こうした偏見が根底にある中、特定者を自動的にあぶり出すことは、社会の差別意識を顕在化させて分断を進めることにつながる危険性とともに、当該者には取り返しのつかない人権侵害をもたらすことになる。

慣れによって抵抗は薄れ、それに乗じて活用が進む現実がある。AI技術はビッグデータの存在が大前提だが、その収集や使い方においては開発者もユーザーも、常に恐れを持つことが必要だ。デジタル技術が人の思考力や批判力の低下を促進させるのでは、本末転倒だ。

2023.1.29

この週末、年末年始に読者の皆さんから寄せられた投稿を整理していると、あらためて「年賀状」や「日記」に関する投稿が多かったことに気づきました。

年賀状では、「書くことが大変になってきたので、年賀状は今年が最後」(東京都内・

1 二百三。昨年十一指摘で修正された語の教です。年間六十四ありました。直したので読者の目は届いていません。驚かれたでしょう。必要な文字がない文字がある(逆)違いや転記する際の表記のルールから

15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

「年後」書くべきかなりあれてい

「このぐらには」の怖さ

週のはじめに考える